日韓伝統造景の眺望景観演出技法についての比較研究

李 元 浩

Ⅰ．序論
Ⅱ．理論的考察
Ⅲ．研究方法
Ⅳ．結果および考察
Ⅴ．結語

要　旨　本研究は、韓国と日本の伝統的な造景の景観を構成する眺望景観の演出技法の一つである借景技法が、両国でどのように具現されているのか、その特性について、事例をもとに相互比較・考察したものである。まず、東洋・西洋の庭園における眺望景観の演出技法を比較し、借景についての従来の特徴を理論的に考察した。実際の研究事例として韓国の屏山書院と日本の仁和寺の庭園空間を対象に、立地と構成、借景の視点および対象の範囲、借景を形成する視覚枠に分けて借景の事例を考察した。

両国の伝統庭園の事例をもとに庭園における借景の特性を比較した結果、韓国の伝統庭園の立地は周辺の景観に対する考慮が優先視され、一方で日本の伝統庭園は相対的に平地に位置しつつ、建築線の区画によって造成された様々な庭園を借景の対象とした。このため韓国の場合は自然そのままの近景、中景、遠景など、借景の対象範囲が様々であるが、日本における借景の対象範囲は塀内部の庭園の近景に限られる。借景のための視覚枠としては、両国とも柱と梁による建築的視覚枠を基本要素としている点で共通するが、庭園における享受様式により、特定地点に定座して周辺の景観を眺望する韓国の伝統庭園の場合、借景の視点が限定的であるため、単一の視覚枠あるいは多数の重なり合う視覚枠がすべて一つの視点から一つの場面を借景とする。日本の場合、回遊式庭園の眺望動作により、一つの対象を複数の視点から借景とする一対多の方式、あるいは複数の対象が視線の透過や対比効果から多様な眺望として借景とする多対多の方式をみせている。

キーワード　空間の位階　視覚構造　視覚枠　立地　眺望範囲

国立文化財研究所

Ⅰ．序論

景観は人間の目にみえる世界のすべてを意味するが、人為的に創造し、設定した審美的風景をも同時に意味している。東洋の伝統造景は自然への順応、畏敬の念、思慕などの自然観にもとづくもので、庭園にもやはり「自然のような」自由な構図と景観演出技法が適用されてきた。古代から伝統時代に至るまで、庭園の内と外に自然そのものを導入し、または自然を模倣した風景を実現させることは、庭園造成において重要な問題であった。これは西洋の庭園が幾何学的で装飾的な規則に従うものとは差異がある。

東洋の庭園が定義する借景の辞典的意味は「景色を借りる」という意味で、中国明代に刊行された『園冶』にその淵源を探ることができる。『園冶』によれば、借景は「庭園内外の景観が持つ本質を獲得したり自然に内在する形態を引き出したりする技法」とあり[1]、「園林は借景により巧妙となる」、「構図を編み出す方法がなければ借景をせよ」として、庭園造成においても借景をもっとも重要な要素として挙げている[2]。

『園冶』では、借景を遠借（遠景を借りること）、隣借（近い所の景を借りること）、仰借（見上げる所に展開する高岳の景を借りること）、俯借（眼下に展開する低い所の景を借りること）、応時而借（季節の風景によって景を借りること）などに区分して説明している[3]。これは借景が、庭園一帯に景観要素を配置することで視線の拡張と時間にともなう変化を眺望できるようにする意図的な景観演出であるといえ、主に中国の庭園内では、畳石を用いた庭園施設の高低差の設定、漏窓[4]による視線の透過と遠近感の形成などが借景に用いられている。

今日では、韓国と日本、中国の庭園文化は独自の様式が発達しているが、過去には中国の庭園文化が大陸から朝鮮半島を経て日本の庭園に多くの影響を与えたという点からみれば、中国の借景技法も韓国と日本の庭園造成と関連があると思われる。すなわち、借景は両国ともに中国を通じて伝わったが、長い歳月を経て自国の文化と嗜好によりそれぞれの借景技法が発達したことで、互いに異なる特徴を有する今日の様式となったと考えられる。

本研究は、国立文化財研究所と奈良文化財研究所による共同研究において、日韓両国の庭園比較研究の一環として、景観を構成する演出技法のうち、借景技法が庭園空間でいかに具現されているかについての事例を考察した。両国の特性を互いに比較することで隣接国間の共通点と相違点の分析を試み、今後の両国の伝統庭園景観関連研究の進展のための比較研究資料として活用されることを目的としている。

Ⅱ．理論的考察

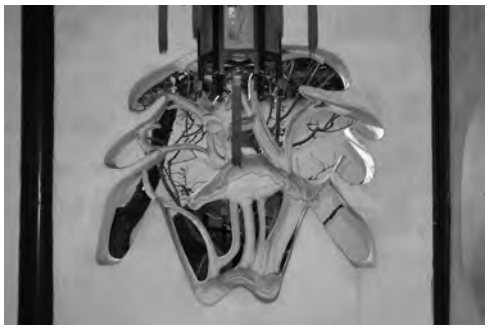
1．東洋と西洋の眺望景観の演出技法

（1）東洋の眺望景観の演出技法

日・中・韓に代表される東洋庭園の特徴は、『園冶』において「人が造っても自然そのままであるかのように」園林を造成すべきと強調されているように、比較的規模が小さくても随所に風情があり、限られた範囲内で含蓄、曲折、暗示などの技法を活用して五感を刺激し、奥深い境地を演出するものである[5]。

中国の園林では、園林内部の景観を意図的に遮ることで、園林を一目で眺望できなくする抑景の技法が主に用いられる。仮山や樹木などの垂直的要素を挟んで曲折する園路によって一部だけをみせる技法を主としている。園路に沿って塀や漏窓に向かって少しずつ姿を現す園林内部の景観が、塀に囲まれた空間のなかに足を踏み入れるとその空間の園林全体を眺望できるようにし、景観感の極大化を誘導する方式である。明朝末期の画家である唐志契は、『絵事微言』において「晒しつつも隠さぬのは浅薄である」と説いており、「山と水ばかりが続き道は無いのかと疑心を抱くとき、行き止まりの道でも道は開ける」とする芸術技法を主張してもいる[6]。

日本の庭園もやはり自然をモチーフに、庭園から眺望できる景観を様々な意匠で演出し



第１図　滄浪亭の漏窓

第２図　留園の漏窓

第３図　塀の月門による景観の演出（寄暢園）

第４図　仮山を活用した景観の遮蔽（寄暢園）

第５図　建仁寺の○△□乃庭

第６図　龍安寺の方丈庭園
（https : //garden-guide.jp/）

第７図　庭園内部から塀越しに眺望できる景観
（良洞村観稼亭）

第８図　庭園内部の四阿から眺望できる景観
（潭陽瀟灑園）

ている。園路を歩きながら観賞する回遊式庭園の場合、動線と視点の移動にともなう景観の変化が重要であるため、複雑な空間分割と狭い園路を配する特徴がみられる。また、自然をそのまま具現するというよりは、自然を象徴的に抽象化し、石や砂などを島や波立つ海と意味づけることで、大自然を庭園に具現しようとする諸技法が現れる。

韓国の庭園は、三国の庭園のなかで、最小限の人工を加味して自然に順応しようとする庭園観がもっとも強く現れている。建築物の延長線上と自然に調和させる直線美と単純美を追求しており、儒教思想に立脚した空間の位階を設け、仮山や樹木の選定、池塘の配置とともに象徴性を付与している。庭園内部の人工的な要素は四阿と石積み、池のみであり、それ以外の庭園に含まれる各要素は渓流や岩盤など、外部の自然環境が主となっている。

このような景観演出方式は、庭園内部からの眺望よりも外部の景観によって視覚を誘導でき、背山臨水の立地的特性と傾斜を活用した空間の上下の位階区分にもとづき、庭園および家屋の前面に開けた周辺景観を眺望できるようにしている。

（２）西洋の眺望景観の演出技法

西洋庭園の眺望景観の演出および庭園造成技法は、幾何学と拡張性に特徴づけることができる。18世紀に入りイギリスの風景式庭園様式が形成されたが、これを除くとイタリアとフランス庭園の影響によりヴィラ、または宮殿を中心に平面幾何学式庭園が造成された。

第９図　ベルサイユ宮殿
（http : //www.chateauversailles.fr）

第10図　ランテ荘
（https : //www.countrylife.co.uk）

その規模は非常に大きく、「馬に乗った人の庭園」ともいわれる[7]。

西洋の庭園を造成した階層は主に国王や貴族で、自然を征服しようとする造営意図が確認できる。生い茂る森林に囲まれた広い荘園は地形を平坦に整え、擁壁を利用して境界を形成した。また、荘園内に直線の広い園路を中心に強い軸線（Vista）を形成し、左右に花壇（Parterre）や噴水、水路、壁泉、彫刻、定型化された樹木と垣根などを対称に配置する方式で庭園を造成するなど、東洋の庭園が思義的意味を内包する反面、形式的な美を追求した。

２．東洋と西洋の借景

（１）東洋の借景

東洋において借景は、一般的に狭小な庭園空間をより広くみせるためにこれを適用したり、庭園外部の景観を内部と結合させ、景観感を向上したりする目的に用いられる。また、単に外部の景観を取り込むだけでなく、時間や季節の変化によりそれぞれ異なる趣を得ることができる。

中国の借景は、大半が園林内部の空間と空間との間の視点の透過によってなされる。大半の園林は高い塀を境界として平地に造成されており、外部景観を借景するというよりは、内部に自然と類似した景観を演出してこれを眺望する内向的方式となっている。この方式により、庭園内部には山や絶壁などを形象化した奇異な形の仮山や太湖石などを配し、内部に水路を造成してそれぞれの空間を結んでいる。各建築物の内部からは独特な文様の扉枠を通じて園林を眺望することができ、塀や回廊の側壁などに設けた様々な模様の漏窓、月門などによって塀越しの景観を眺望する景観の枠を設定した。

韓国の借景方式は外向的借景の特徴が確認できる。韓国の庭園立地は、背山臨水の風水的立地体系に従い周辺に秀逸な山水が展開する場所が選ばれるため、庭園の外部景観も庭園内部から眺望できる。外部景観を眺望するための方式として、各建築物が外部景観を眺望するに適した向きを設定し、それぞれの建築物が軸線に沿った直列配置形式となっている。建築要素もやはり柱と梁、単純な四角形の門と窓を設け、これらが形成する四角形の

第11図　扉枠を通して眺めた園林の借景
（留園）

第12図　ガラス窓を通して眺めた園林の借景
（拙政園）

第13図　建築的要素を活用した園林の借景
（寄暢園）

第14図　扉枠と欄干を活用した園林の借景
（留園）

第15図　塀を通して眺めた渓流の借景
（独楽堂）

第16図　建築的要素を活用した庭園の借景
（広寒楼苑）

フレームのなかで外部景観を眺望する方式がみられる。

日本では、室町時代の庭園にもその事例がみられるように、比較的早い時期から借景技法が適用されている。書院造庭園は部屋のなかから庭園を観賞することに主眼を置いた庭園で、書院造建築の向きは内部の庭園施設と外部の借景された景観を鑑賞できるよう窓が配置され、内向的特徴と外向的特徴が同時に確認できる。以降、書院造庭園は多数の書院造建物が一つの庭園空間を共有する平面演出へと変化しながら庭園の景観を分散させる構成が現れる。このため書院造建物に隣接する庭園は、それぞれの建物から眺望できる中心

第17図　鹿苑寺と衣笠山の借景（https : //www.shokoku-ji.jp/kinkakuji/）

第18図　ヴォー＝ル＝ヴィコント城からの借景
（https : //thegardenvisitor.co.uk/）

第19図　ヴィラ・デステの借景
（https : //en.wikipedia.org/）

景観を持つにいたり、このような借景方式は回遊式庭園の成立に影響を与えた[8]。

（2）西洋の借景

西洋の平面幾何学式庭園は、眺望対象の大半が庭園内部の施設に限られる。庭園の境界をなす森林は単に背景としての機能を果たし、庭園を眺望できる中央のヴィラまたは宮殿からの眺望は、庭園の軸を形成する園路に沿って対称型の庭園を対象とする。したがって、庭園における借景は、直線の軸に沿って開けた庭園全体を一望することができ、ヘーゲル（Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770～1831）は、「大自然を、屋根がぽっかり空いた広々した建物のように改造した」と西洋式庭園の借景のあり方について言及している[9]。

Ⅲ．研究方法

本研究は、日韓両国の庭園の代表的な景観演出技法である借景の特徴を比較すべく、韓国の屏山書院、日本の仁和寺を研究対象とした。Itoh[10]は、庭園における借景の条件として、第一、建物の敷地内に庭園があること、第二、遠景を庭園内部の景観として眺望するための物体の存在があること、第三、造営者がみせたい特徴を取り入れて設計すること、第四、借景がなされた遠景が庭園の景観と連係していること、という４つのデザイン要素を提示している。これは、借景が建築物外部の景観を庭園内に取り込むことに一次的な目的がある以上、庭園の立地は必ず、周囲の環境が借景するに適した場所を選択するのが基

本的な原則であるといえ、鑑賞者の視点にもとづいて眺望できる対象と範囲を設定することが必須となる。また、借景が庭園でなされる単純な形態の眺望との差別化を図る装置として、視覚枠の形成が求められる。視覚枠についての造作的定義としては、庭園でなされる眺望の範囲とは異なり、構成要素によって形成される視覚構造を意味しており、これは大半の庭園内の建築物の柱や梁、回廊など、線的な要素により構成された額縁のような構造からみられる景観に限定した。分析は韓国屏山書院の遊息空間および講学空間、日本の仁和寺の御殿一帯を対象に、立地と構成、借景がなされる視点と対象の範囲、借景を形成する視覚枠について考察をおこなった。

研究の対象地である韓国の屏山書院は、1572年に造成され、1863年に書院として昇格したもので、安東河回村とあわせて2010年に世界文化遺産に指定されている。1868年の大院君による書院撤廃令の際にも残った47の書院のうちの一つであり、前面の自然環境に対して北高南低の地形に沿って書院の建物配置構造と空間的位階が保存されており、韓国の伝統庭園の借景技法の代表的な事例であるといえる。書院の空間は一般に入口部分の遊息空間と講学空間、上段の祭享空間とに区分されるが、祭享空間は神位を祀る場所であり庭園施設の導入が制限されている一方、遊息空間は休息のための場所として周辺の景観を眺望できる形態となっており、講学空間は修学のための場所で、遊息空間と結ばれる。屏山書院もまた、書院の一般的な空間構成となっており、遊息空間である晩対楼一帯と講学空間である入教堂も研究対象とした。

日本の仁和寺は、日本最古の造園秘伝書である橘俊綱の『作庭記』が保管されている寺院である。1994年に世界文化遺産に指定され、日本の庭園師を養成する機関としても有名で、象徴性が高い。また、平安時代初期の寺院として17世紀の建物群の大半が残っているため、日本の伝統庭園の借景技法を考察する上で適切であると判断できる。特に仁和寺の御殿は京都市の名勝に指定されており、御殿の建築物を中心に、池泉回遊式様式の北庭と枯山水様式の南庭が仁和寺内の核心的な庭園空間として代表される。屏山書院の現場調査は、2017年度に国立文化財研究所が実施した重要遺跡地の造景実態調査により2017年２月から11月までおこない、日本の仁和寺についての現場調査は2017年７月におこなった。

Ⅳ．結果および考察

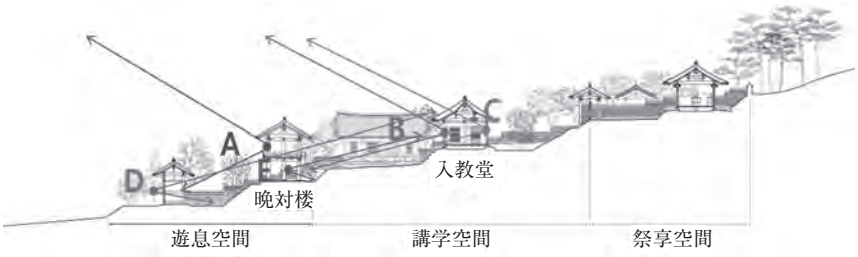
１．韓国・屏山書院の借景

屏山書院の立地および空間構成をみると、花山が書院の主山に該当し、晩対楼を起点に約300 m 前面に絶壁の屏山が洛東江を間に挟むかたちで位置している。屏山書院内の建築物のうち、晩対楼と入教堂は前面の自然景観に向かって座向が設定され、屏山と洛東江を眺望できる地点にあたる。このような構造は、傾斜を利用して位階にもとづく視覚的開

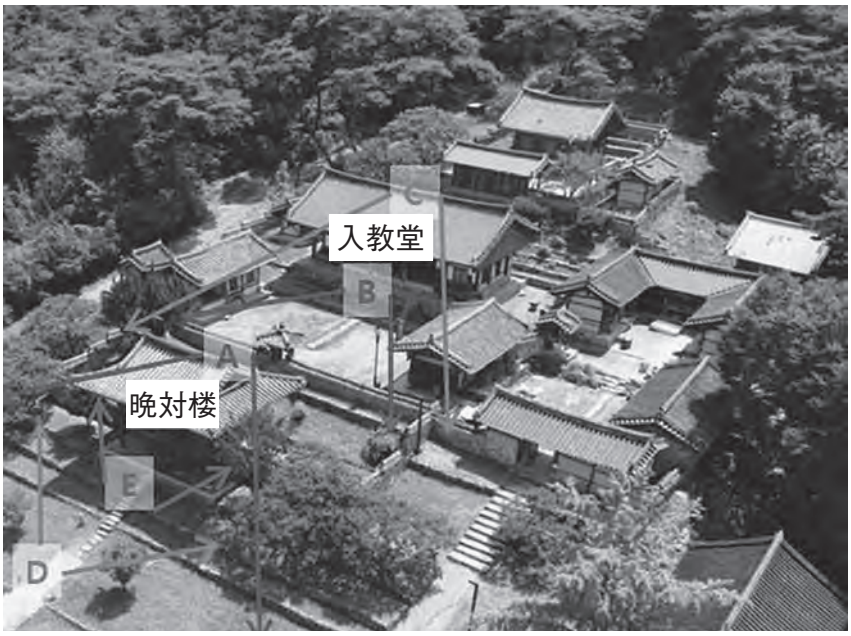
放性を確保し、前面部の眺望を景観的に開かれたものにするため、楼閣を造成する基本的な建築構造を示しているが、これは書院の外部空間でもっとも顕著となっている。

晩対楼は屏山書院の遊息空間として楼閣の特性上、二層の長方形構造を持ち、一階は柱だけを立てて完全に開放されるよう施され、二階は周囲に鶏子欄干のみを設置して完全に開けた空間が造成されている[11]。晩対楼に上がると外山門である復礼門と境内のサルスベリ群が近景で眺望でき、中景には前面の砂州と洛東江、屏山が、遠景には花山の松林が眺望できる。これらの景観は、柱と梁により形成される七つの升目が四角形の視覚枠となり、屏風のように借景の枠を形成している。

第１表　屏山書院の視点にもとづく視覚構造



Key-map

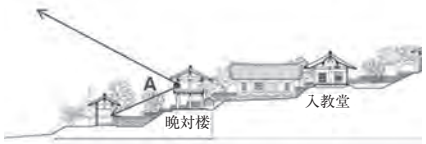


番号	A	B	C	D	E
眺望地点	晩対楼	入教堂	入教堂後面	復礼門	晩対楼楼下
借景形態	俯借	俯借	俯借	仰借	仰借

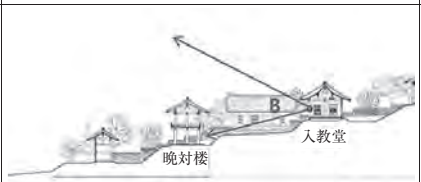
図面：(財)韓国書院統合保存管理団をもとに再作成

入教堂は屏山書院の中心にある講学空間で、内部から前面の屏山と川辺を眺めると、東斎と西斎、晩対楼が重なり合う自然景観を眺望することができる。これらの景観は晩対楼に比べ後面に位置することから、より広い眺望範囲となるが、東斎と西斎を両側に配することで、入教堂からの眺望を晩対楼のように洛東江と屏山、花山の松林に限定する特徴が

第 2 表　晩対楼の俯借

Key-map	眺望景観
	

第 3 表　入教堂の俯借

区分	Key-map	眺望景観
入教堂の俯借		
入教堂背面の俯借		

第 4 表　復礼門と晩対楼楼下の仰借

区分	Key-map	眺望景観
復礼門の仰借		
晩対楼楼下の仰借		

みられる。これは庭を取り囲む各建物によって、書院内部の慎ましやかな雰囲気との対比をなす開放効果が得られ、入教堂の柱と梁が形成する視覚枠内に晩対楼の視覚枠が重なり合う。さらに、中心軸に沿って配置された晩対楼、入教堂などの建物立地は、入教堂後面の窓枠からみえる視覚枠が追加的に重なり合いながら様々な視覚枠が一つの焦点景観をなしている。

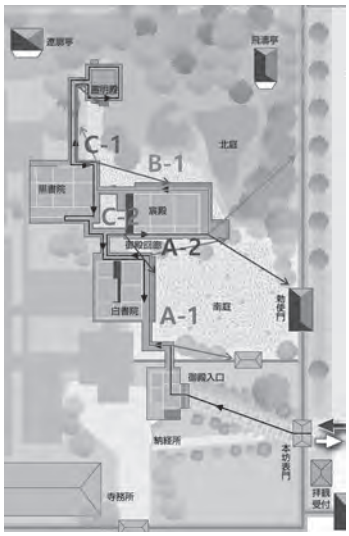
一方、復礼門と晩対楼楼下からの借景には、低所から高所を見上げる仰借の技法が適用されている。書院建築物の直線型の平面配置は、復礼門の扉枠による視覚枠が形成され、さらにその内部に晩対楼の楼下面、入教堂の柱などが、晩対楼の楼下では入教堂の扁額と書院内部の姿が、小さな視覚枠の形となり重なり合う様子がみられる。

2．日本・仁和寺の借景

京都の仁和寺は沢山南麓の平地に造成された寺院で、御殿は仁和寺の南西側に位置する。仁和寺御殿の境内から眺望できる対象はすべて庭園で、池泉回遊式の北庭と枯山水式の南庭が代表的である。御殿の白書院と黒書院、宸殿、霊明殿を結ぶ回廊に沿って左右に小さな庭園が近景の形で眺望できる。

各建築物は塀内部の庭園空間に向かって建ち、南庭の北側と西側には、それぞれ宸殿と白書院が造成されている。南庭の中心には枯山水式庭園が広がっており、庭園の北側には、左右にそれぞれ桜の樹（左近の桜）と橘の樹（右近の橘）を植栽し、景観の焦点を形成し

第５表　仁和寺御殿の視点にもとづく視覚構造

Key-map	番号	眺望地点	眺望対象	借景形態
	A-1	白書院から眺めた南庭	南庭	隣借
	A-2	宸殿から眺めた南庭	南庭	隣借
	B-1	宸殿から眺めた北庭	北庭	隣借、遠借
	C-1	回廊から眺めた北庭	北庭	隣借、遠借
	C-2	回廊から眺めた小庭	小庭	隣借

図面：仁和寺のホームページ（http://www.ninnaji.jp/en/）をもとに再作成　　黒の矢印は観覧動線

ている。

北庭は、西側の霊明殿と南西側の黒書院、南側の宸殿が庭園を取り囲む形となっており、各建築物の内部から眺望する庭園は、それぞれ異なる姿をみせる。建築物周辺に開けた白砂と曲線形の池が配置され、石橋に沿って造成された樹林帯には滝と庭園石が配置されている。また、樹林帯の右側にある茶室と仁和寺境内の五重塔がそれぞれ中景と遠景の対象となる。

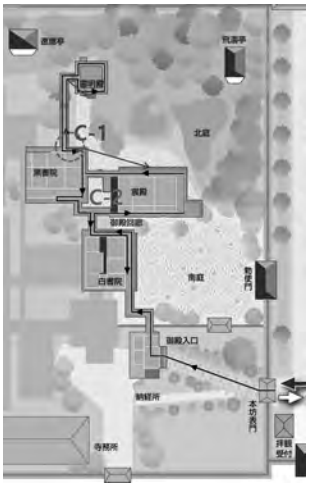
第 6 表　南庭の隣借

Key-map	眺望景観
	 白書院から眺めた南庭 宸殿から眺めた南庭

第 7 表　宸殿の隣借および遠借

Key-map	眺望景観
	 宸殿から眺めた北庭（隣借、遠借） 宸殿から眺めた北庭（隣借）

第 8 表　回廊の隣借および遠借

Key-map	眺望景観
	 回廊から眺めた北庭（隣借、遠借） 回廊から眺めた小庭（隣借）

第20図　回廊の連結によって連続する多数の視覚枠（正面と側面）

各建築物を結ぶ回廊は建築線に沿って直線型で屈折しており、両側が開放された形で動線および視線の移動によって、連続する庭園の借景がなされるように造られている。また、回廊により形成される建築物中央の空間に小規模の庭園を置くことで、御殿内部からの景観がつながるように工夫されている。

仁和寺は建物を取り囲む廊下の柱と梁、回廊の窓枠によって一つの建築的視覚枠を形成している。また、特定地点からの静的な眺望というよりは回廊の連結を通じて動線が移動することにより、景観的な庭園の姿が多様な平面の視覚枠で連なるようにした技法が確認できる。

また、屈折した回廊の連なりは、各建築物の開口部をすべて開放すると、建物内部の扉枠と回廊の窓枠などによる多数の視覚枠が一望できる。数々の軸線が形成された借景の視覚枠を持ち、屈折部では視覚範囲がもっとも長い長辺で対角線の眺望が可能となり、これによって庭園全体の姿を確認できるようにした。

3．日韓庭園における借景の特性比較

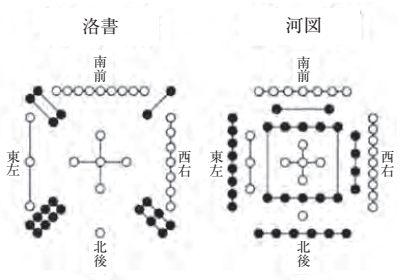
（1）庭園の立地および構成

韓国における伝統庭園の立地については、庭園に込められた自然観と関連づけることができるが、古朝鮮時代の自然崇拝思想から風水地理説、儒教思想など、様々な思想が秀麗な自然環境と結合し、背山臨水地形に最小限の人工を加味する自然親和的な庭園を造成させた。風水の形状にもとづき山を背にした立地的特性は、庭園の眺望対象となる建築物が傾斜面に位置し、座向も前面に開けた景観を眺望できるような構造を備えることとなった。これは朝鮮時代後期に至り儒教思想が幅広く作用するとともに、位階上の構造から顕著となる。儒教がもっとも重視する上下尊卑の位階は、忠孝思想にはじまり、目上の者を敬い自分を低めるための生活様式から出発して、空間を造成する基本原則にまで作用する。特に建築物およびこれに関連する空間の位階を区分すべく、傾斜を利用して石積みを造成したり、空間を方形で明確に区画したりしながら、空間の独立性と調和を同時に考慮した。

日本では庭園立地の選定において、大半が平地に造成される。韓国の庭園と比べると、相対的に周辺の景観に対する考慮が少ないかわりに、庭園内の敷地と建築物の造成後、塀に囲まれた内部空間に庭園を区画することで、建築物中心の緊密な空間構成がなされている。これにより庭園空間は塀と建築物により分けられ、回遊式庭園様式の発達は、建築物とこれを結ぶ動線に沿って順次、あるいは特定地域に対する眺望が形成されながら、庭園の特性によって借景の具体的な内容が決定される。

（2）借景の眺望対象および範囲

韓国の伝統庭園は、平面形態から、塀で囲まれた内院と塀の外の外院、庭園に間接的に影響を与えうる影響圏とに区分できる。内院を構成する要素として怪石と建築物、池、階段花壇、樹木などが最小限の配置をなしており、外院の構成要素としては塀に隣接する渓流や河川、周辺の山林などが、外院の外の自然環境が影響圏域の構成要素に含まれる。これは借景の観点において、庭園内の建築物から眺望できる内院の構成要素は近景、外院の構成要素は中景、影響圏域の構成要素は遠景として関連づけることができる。



第21図 『作庭記』風水の基本である河図と洛書

第22図 『作庭記』にみられる回遊式庭園

日本では、塀で区画した敷地内で庭園を眺望対象と捉えている。借景の眺望対象としては、一部の大規模庭園は、地形の高低差や樹林地の造成により中景に周辺の景観を含んでいるが、多くの場合、庭園内部の怪石や樹木、砂などの構成要素が近景に該当する。造営者が自分の空間から眺めたい景観をその趣向にもとづき庭園を造成し、そこで再創造された自然を眺めた。

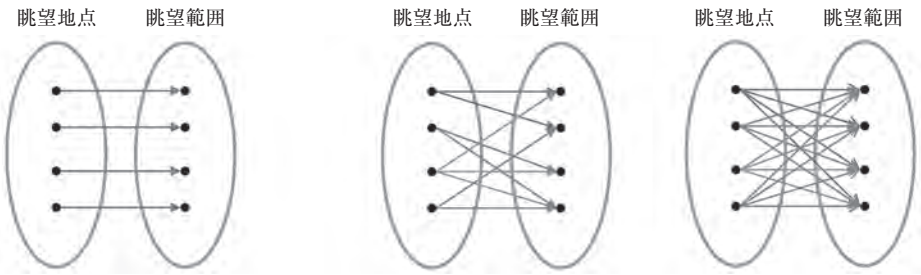
（3）視覚枠の形成

視覚枠はあたかも額縁のように建築的要素で構成された枠のなかに、実際の景観を取り込むことで、実際の風景があたかも絵であるかのように感じられるよう、自然美を芸術美へ昇華させる方法といえよう。

韓国の伝統庭園は、特定地点に座して周辺景観を鑑賞する享受様式が主体をなしながら、借景は一つの地点からみえる単一の景観が一対一の対応方式として現れる。すなわち、庭園施設が位置する内院から遠く影響圏域に位置する山水景観までの三次元形態の景観要素が、柱や梁、門窓などの建築的視覚枠により、一つの場面として認識されるのである。このような視覚枠は、直線上に建てられた各建築物との関係において仰借と俯借の技法が適用された結果、複数の視覚枠がそれぞれのモジュールとして重なり合い、二次元の焦点景観を形成することとなる。

日本の伝統庭園も、建築的視覚枠により借景がなされる様相は韓国と同様であるが、庭園を取り囲む各建築物が連係してこれらの視覚枠がつながりながら、庭園の正面、側面、背面などの姿を三次元で様々に眺望できる一対多の対応方式を確認することができる。また、建築物に連結した廊下と各建築物の間に形成される視覚枠が重なり合い、複数の借景対象が視線の透過、遠近感の強化などによって様々な場面として認識される、多対多の対応方式から、庭園造成過程における開口部の枠組づくりに関する様々な計画的意図がうかがえる。

これらの庭園は、造営当時の庭園内部の景観が外部の主な風景点といかに調和をなすべ



［韓：一対一の方式］　［日：一対多/多対多の方式］

第23図　日韓庭園における視覚枠の形成に関する特性

きかを考慮した事例であり、庭園内部から外部の景観を眺望するためにもっとも望ましい位置を調べ、そこで造営者または利用者が鑑賞できる場所として適切に配置したという特徴を持つ。単一の軸線を有する屏山書院では、一方向に一つの対景を造ることが自然な現象であり、曲折する動線が連続する仁和寺は、動線と視点の方向が変化するにともない多数の対景を造り、回遊する方式を演出したのである。

Ⅴ．結語

本研究は、韓国と日本の伝統庭園の景観演出技法である借景の適用方式について、考察を試みたものである。韓国の屏山書院と日本の仁和寺を対象に、両国の借景特性を比較した結果は、次の通りである。

第一、韓国の屏山書院は、前面に開けた洛東江と屏山に向かって北高南低型の立地を有しており、復礼門と晩対楼、入教堂へと連なる直線型の建物配置は、空間の位階に従った仰借と俯借の借景技法が適用されている。晩対楼では、境内のサルスベリ群が近景を、前面の砂州と洛東江、屏山が中景を、屏山越しの山岳地帯および松林が遠景を借景するようにし、入教堂の柱と梁が形成する視覚枠内に晩対楼の視覚枠を重ねるなど、複数の視覚枠が重なり合うことで一つの焦点をなすようにしている。一方、復礼門は晩対楼の楼下および入教堂の柱と梁が形成する視覚枠の重なりにより、入教堂の扁額を眺望できる構造を有していた。

第二、日本の仁和寺は平地に造成された寺院庭園であり、建築物と塀により庭園が取り囲まれた、閉じた構造を有している。各建築物の座向は庭園に向かっており、枯山水庭園と池泉回遊式庭園、回廊に囲繞された小庭の姿を近景とし、回廊と床によって結ばれる動線は視点の移動によって様々な場面へと認識されることになる。また、建物と回廊により形成される建築的視覚枠の連続と重なりは、景観的な庭園の姿を平面で結んだり、屈折した多数の視覚枠がそれぞれの軸線を形成したりしている。

第三、韓国の屏山書院と日本の仁和寺をもとに両国の庭園における借景の特性を比較した結果、韓国の伝統庭園の立地は自然親和的な自然観と結合し、周辺の景観が優先的に考慮されるのに対し、日本の伝統庭園は平地に造成され、塀内部の空間区画にもとづき造成された様々な庭園を借景の対象とした。このため韓国の場合は、自然そのままの近景、中景、遠景が広い眺望範囲を構成しているが、日本では眺望範囲が人工的に造成された近景に限定されるという特性をみせる。借景のための視覚枠の形成は庭園における享受様式と関連づけられるが、特定地点に座して周辺の景観を眺望する韓国の伝統庭園における様式は単一の視覚枠、あるいは多数の重なり合う視覚枠が、すべて一つの視点から一つの場面として認識される様相が確認され、日本では建築物の連結によって連続的に鑑賞する回遊

式眺望様式から、一つの対象を複数の視点から借景する一対多の対応方式や、また複数の対象が視線の透過や遠近感の強化によって様々な場面をなす多対多の対応方式が加わる。

本研究は、韓国と日本の庭園を対象に、両者の比較による結果をまとめたもので、今後は各庭園の類型別に、多数の事例比較を通じてその特徴をまとめ、両国の庭園景観演出技法のうち、借景における文化的類似性と相違性を導き出すことを最終目標としている。

註

1 최기수「차경의 관점으로 본 한국의 전통정원」『한국전통조경학회지』23巻 1 号、2005年。
2 한동수『중국 고건축・원림감상 입문』도서출판 세진사、1997年。
3 한국전통조경학회『동양조경문화사』도서출판 대가、2011年。
4 中国の園林において塀や回廊の側壁に設けられた、様々な形の窓を意味する。漏窓を通して園林外の景観を眺望することもでき、漏窓の格子を様々な模様で装飾することで、あたかも額縁を眺めるかのような景観感を感じることができる。
5 蕭默著、박민호 역『건축의 의경』글항아리、2019年。
6 前掲註 2 。
7 前掲註 5 。
8 前掲註 3 。
9 前掲註 5 。
10 Itoh, T., 1973, Space and Illusion in the Japanese Garden. New York, Tokyo and Kyoto : Weatherhill / Tankosha.
11 정재훈『한국전통조경』도서출판 조경、2005年。

参考文献

이유직「중국원림의 차경이론 연구」『한국전통조경학회지』16巻 4 号、1998年、pp.35－45。
(재) 한국의 서원 통합보존관리단 홈페이지
鹿苑寺ホームページ https : //www.shokoku-ji.jp/kinkakuji/
ウィキペディア ホームページ https : //en.wikipedia.org/
仁和寺 ホームページ http : //www.ninnaji.jp/en/
日本の庭園ガイド ホームページ https : //garden-guide.jp/
ベルサイユ宮殿 ホームページ http : //www.chateauversailles.fr/
Country life ホームページ https : //www.countrylife.co.uk/
Garden Visitor ホームページ https : //thegardenvisitor.co.uk/

한 · 일 전통조경의 조망경관 연출기법 비교연구

이 원 호

요 지 본 연구는 한국과 일본의 전통조경 경관을 구성하는 조망경관 연출기법의 하나인 차경기법이 한국과 일본에 어떻게 구현되었는가에 대한 사례를 통해 그 특성을 상호 비교 고찰하였다. 먼저 동서양 정원에서의 조망경관 연출기법을 비교해 보고 동양과 서양의 차경의 기존 특징을 이론적으로 고찰하였다. 실제 연구사례 대상지로 한국 병산서원과 일본 인화사 정원공간을 대상으로 입지와 구성, 차경의 시점 및 대상의 범위, 차경을 형성하는 시각 틀로 구분하여 차경 사례를 살펴보았다.

양국 전통정원의 사례를 통해 정원의 차경 특성을 비교한 결과 한국 전통정원의 입지는 주변의 경관에 대한 고려가 우선시되는 반면, 일본의 전통정원은 상대적으로 평지에 위치하면서 건축선의 구획에 따라 조성된 다양한 정원을 차경의 대상으로 삼았다. 이에 한국의 경우 자연 그대로의 근경, 중경, 원경 등 차경 대상의 범위가 다양하게 나타나고 있으나, 일본 차경 대상의 범위는 담장 내부 정원의 근경으로 한정된다. 차경을 위한 시각 틀로는 양국 공히 기둥과 보에 의한 건축적 시각 틀을 기본 모듈로 한다는 데서 공통점을 지니고 있으나 정원에서의 향유행태에 따라 특정 지점에서 정좌하여 주변의 경관을 조망하는 한국 전통정원의 경우 차경의 시점이 한정적이기 때문에 단일 시각 틀 혹은 다수의 중첩된 시각 틀 모두 하나의 시점에서 하나의 장면이 차경되는 양상을 보이고, 일본의 경우 회유식 정원 조망행태에 따라 하나의 대상을 여러 시점에서 차경하는 일대다 방식 혹은 여러 대상이 시선의 투과나 대비효과를 통해 다양한 장면으로 차경되는 다대다 방식을 보이고 있다.

주제어 : 공간 위계, 시각구조, 시각 틀, 입지, 조망범위

A Comparative Study on Landscape Formation in Traditional Landscape Architecture in Korea and Japan

Lee Wonho

Abstracts: This research analyzes how the borrowed scenery technique which is one of the landscape formation techniques in traditional landscape architecture in Korea and Japan was implemented in the both countries with examples to compare their characteristics. Firstly, this study compares the landscape formation techniques used in Asian and Western gardens and theoretically examines the characteristics of borrowed scenery techniques in Asia and the West. Based on the case study analysis on the gardens of Byeongsan Seowon in Korea and Ninnaji Temple in Japan regarding borrowed scenery in terms of location and composition, viewpoint and scope of the borrowed scenery, and visual frame of the borrowed scenery can be summarized as follows.

The comparative study on the characteristics of traditional gardens of Korea and Japan suggests that traditional Korean gardens give priority to consideration of surrounding landscape while traditional Japanese gardens located on a relatively flat ground borrow various sceneries of garden created by the division of the architectural line. Accordingly, in the Korean style, the scope of borrowed scenery varies from near, middle to distant views of nature while the scope of borrowed scenery in the Japanese style is limited to a near view of the garden inside the wall. Both countries commonly use a visual architectural frame formed by pillars and beams as a basic module. However, how they enjoy the view in the garden are different. In the case of a Korean garden where surrounding landscape is viewed from a specific seated position, the viewpoint is limited and thus one scene is borrowed from one viewpoint whether through a single frame or multiple overlapping frames. In the case of a Japanese garden, depending on the viewing behavior in a pond garden, one object can be borrowed from various viewpoints (one-to-multiple method) or different objects can be borrowed in various scenes through the transmission of sight or contrast effect (multiple-to-multiple method).

Keywords: space hierarchy, visual structure, visual frame, location, scope of view